

第24回小諸・藤村文学賞最優秀賞受賞作品

高校生の部

## 空色のランドセル

宮崎県立宮崎大宮高等学校二年

大友亜希子

「これがいい」

小学校の入学に胸を躍らせる幼い私が選んだのは空色のランドセルだった。

「本当にいいの？赤やピンクじゃなくていいの？」

不安そうな母に「これがいい」だけを繰り返した。私の眼には華やかな赤やかわいらしいピンクはなくて、空色だけがピカピカ光って見えた。大空をぎゅっと詰め込んだような、あの色が大好きだった。

私はこの夏、学校からの派遣でベトナムへ海外研修に行った。伝統を引き継ぎ続けている村の見学や、ベトナムの農業について学ぶなど濃密な時間を過ごすことができた。現地の学生とのかかわりも多く、自由時間には日本やベトナムについてひたすら語り合った。

私はLGBTについての話題、特に彼らのカミングアウトをめぐる議論に興味があり、個人的に勉強を続けている。この機会に、海外の意見も知りたいと思い、「もし友達からLGBTだとカミングアウトされたらどうするか」をベトナムの学生たちに聞いてみると、そろって、「言ってくれてありがとうと言う」とか「ほかの人には絶対に言わないとって安心させる」といった、まさしく模範解答だろうと思える答えを返してくれた。そんな中で、一人だけ違う答えを言った人がいた。

「僕なら、なんでもっと早く言わなかったんだ、って怒るね」

少しニヤニヤしながら言う彼に、私は怪訝な顔をするのを抑えられなかった。もっと早く言わせてどうしたいというのだろう。からかうつも

りなのか。なんて嫌な人なのだろう。なんと返すべきか悩んでいると、彼は不意に真剣な顔になって続けた。

「だって僕もそうだから」

私は驚き、一瞬言葉を失った。そして同時にそのことを恥じた。彼はカミングアウトしたのはこれが初めてだと言った。そして、ベトナムでもやはりLGBTへの理解は少ないから黙っていたほうが賢明なのだとして少し悲しげに教えてくれた。きっと変わり者だと思われるから、と。

全校生徒七百人以上の中で私だけだった空色のランドセルは、入学式の日から注目を集めた。きれいだね、と声をかけてくれる同級生もいたが、全員がそうではなかった。青のランドセルなんて変だ、なぜ皆と同じ色にしないのか、と文句をつけられたのも一度や二度ではない。「変わり者」のレッテルは中学に入ってもはがれることはなかった。後になって聞いた話だが、私が友人関係に悩んで学校に行きたがらなくなったことを母が保護会で言った時、ある保護者からこんなことを言われたと言う。

「駄目なものはダメと言わないからいけないのよ。ほら、あの一人だけ違う青のランドセルだって…」

ベトナムから帰ってきて、ある人と話していた時、突然、

「俺、実はホモなんだよね」

と言われた。「ホモ」という差別的用語に引っ掛かりを覚えつつも、彼がカミングアウトしてくれた勇気を思い、

「そうなんだ」

とだけ返すと、

「まさか本気にしているの？嘘に決まっているじゃないか」

という答えが返ってきた。私は唾然とした。

彼は、自分がゲイであるという嘘を、冗談として言ったのだった。ゲイであることがあり得ないこととして認識されて、初めて冗談として成り立つ冗談を、彼は何の気なしに放っていて、その前提が間違っているということに、彼は少しも気づいていないようだった。そして彼は「決まっている」と言った。LGBTの割合は日本では七・六パーセントと

も言われている。そして実際に多くの人たちが、既にカミングアウトをしている。決して、いないに決まっているなんてことはないのだ。私は、ベトナムにいる「彼」のことを思い出して胸が痛くなった。彼がこれを聞いたらどう思うだろう。「そんなもんだよ」と、また切なげに笑うだろうか。ほかの人と何かが違うということはこんなにも粗雑に扱われるべきなのだろうか。

ちょっと悲しいことがあった時、浮かんでくるのはあのランドセル。なんと言われてもこれがいいんだ、これが私なんだ、そうやって堂々と学校へ通っていた日々が思い出される。母は私によく言ったものだった。

「亜希子が帰ってくるのはいつも一目でわかるよ」

集団下校の中、私のランドセルは住んでいた二階のベランダからもよく見えたという。

マイノリティー、でいいじゃない。私は、ここにいるよ、ここに立っているよ、そう皆に伝えるフラッグがほんの少し増えただけ。そう思えば「違っている」のも悪くない。

今、街を見渡せば、色とりどりのランドセルを背負った女の子たちが歩いている。紫、黄色、茶色、もちろん空色も。楽しそうに歩く彼女たちを見るたび、わたしはとても嬉しくなる。小学生の頃のあなたは間違っていなかったよ、そう励まされているようだ。

「変わっている」じゃなくて、「違っている」。時間はかかるけれど、いつか彼らもそれに気づく時が来るだろう。

ベトナムの「彼」にもその日が来るまで、私は胸を張って、見えない空色のランドセルを背負い続ける。